

媚薬

で一線を越えてしまった

女子大生

の恋



## 目次

第一章	媚薬コーヒーで堕ちた清楚な先輩……………	三
第二章	私だけのものにするために……………	三九
第三章	恋人のいる親友との一夜……………	七八

## 第一話 媚薬コーヒーで堕ちた清楚な先輩

夕方の研究室は、いつものように静かだった。

窓から差し込む柔らかな陽光が、実験台の上に散らばった試薬瓶やノートを優しく照らしている。生命科学のラボで、誰もが忙しく動き回る時間帯だけど、今は私と氷川詩織先輩だけだった。

二十三歳の彼女は、いつも通り白衣を着て、黒髪をポニーテールにまとめ、穏やかな笑みを浮かべながらデータを入力している。優しくて清楚で、誰からも慕われる先輩。私の憧れの人だ。

私は二十歳の佐倉凜。まだ学部生だけど、このラボでアシスタントをさせてもらっている。詩織先輩の隣で作業するのが、毎日の一番の楽しみだった。

彼女の香り。シャンプーの柔らかな匂いが、時折ふわっと漂ってきて、そのたびに心臓がドキドキする。今日も、先輩の細い指がキーボードを叩く音を聞きながら、私は自分の実験ノートを睨みつけていた。

でも、頭の中はまったく集中できていない。

「凜ちゃん、どうしたの？ 顔が赤いよ。体調悪い？」

突然、先輩の声が響き、私はびくつと肩を震わせた。

彼女が椅子を回して、私の方を向いている。心配そうな瞳が、優しく私を捉えた。その清楚な表情に、胸が熱くなる。

「あ、いえ……大丈夫です。ただ、ちょっと疲れてるだけかも……」

慌てて笑顔を作って答えた。実際、疲れているわけじゃない。ただ、先輩の存在が近すぎて、息が詰まるだけだ。



白衣の下に隠れた、細くてしなやかな体。

想像するだけで、体の奥がじんわりと熱を帯びる。

「そう？　だったら、休憩しようか。私もコーヒー淹れるよ。一緒に飲む？」

先輩は立ち上がり、部屋の隅にあるコーヒーマーカーの方へ歩き出した。その後ろ姿。白衣越しにうっすら浮かぶ腰のラインに、視線が釘付けになる。

——今なら。

心の奥で、ひとつの考えがよぎった。

ポケットの中の小瓶。悪友のサラからもらった、あの媚薬。まだ入っていないのに、そこにあるだけで重く感じる。

「ありがとうございます、先輩。私、淹れますよ。座っててください」

私は立ち上がり、彼女の肩に軽く手を触れた。  
意図的に、指先を少しだけ滑らせる。

温かくて、柔らかい。

触れた瞬間、電気が走ったみたいに、背筋が震えた。

先輩は振り返り、にこっと微笑む。

「いいの？　ありがとうございます、凛ちゃん。優しいね」

その言葉に、胸がきゅっと締め付けられる。

本当に優しいのは、先輩の方だ。でも——今日は、この優しさを、少しだけ利用する。

コーヒーカップを手に取りながら、心の中で囁いた。

この清楚な先輩を、乱れさせたい……。

研究室の空気が、いつもより少し重く感じられた。

コーヒーメーカーの音が静かに響く中、私はカップを二つ用意する。

一つは普通のブラック。

もう一つは――。

小瓶から透明な液体を、ほんの数滴。

無臭で無色。コーヒーの香りに紛れ、跡形もなく溶けていく。

媚薬の説明書きが、頭をよぎる。

「摂取後十分から二十分で発現。体温上昇、皮膚過敏、性的興奮の急激な増幅。理性の抑制が効きにくくなり、触覚が極端に敏感化。持続時間は一時間から二時間。副作用として、強い渴望感と軽い放心状態が発生する可能性あり」

心臓が、早鐘のように鳴っていた。

これを先輩に飲ませたら、どうなるんだろう。

詩織先輩は椅子に座り、待っていてくれている。

白衣の袖を軽くまくり、細い腕が露わになっていた。その白い肌が、無性に触れたくなる。

「できました、先輩。どうぞ」

笑顔でカップを差し出す。

先輩は「ありがとう、凛ちゃん」と柔らかく微笑み、それを受け取った。

指先が触れ合う。

まだ媚薬は効いていないはずなのに、私の方が熱くなった。

先輩はカップを口に運び、一口、二口と飲む。

喉が小さく動くのを見ただけで、息が詰まる。

「ん……美味しい。凛ちゃん、今日はちょっと甘めだね」

「え、ええ……少し砂糖、多めにしたんです」

嘘だ。

本当は、味覚が少し変わるかもしれないだけ。でも、先輩は気づいていない。  
い。

十分ほど経った頃。

先輩の頬が、ほんのり赤らみ始めた。

最初は、コーヒーの熱さのせいかと思った。でも違う。呼吸が、少し浅く、速くなっている。

白衣の襟元から覗く鎖骨が、かすかに上下していた。

「ふう……なんだか、部屋が暖かいね」

小さく呟き、先輩は自分の胸元に手を当てる。

指先が布地を押さえただけなのに、体がびくつと震えた。

「あ……変……」

声が、いつもより甘く、掠れている。

潤んだ瞳。少し広がった瞳孔。

媚薬が、効き始めている。

先輩の体に起きている変化を、私は息を詰めて見つめていた。

頬ははっきりと赤く染まり、呼吸は浅く、熱を帯びている。白衣の胸元が、呼吸に合わせてわずかに上下するたび、その内側に秘められた熱が伝わってくるようだった。

「先輩、大丈夫ですか？」

そっと声をかけながら、私は一步近づく。

先輩の肩に、指先をそっと置いた。

その瞬間。

「んっ……！」

はつきりとした反応が返ってきた。

触れられただけなのに、体が跳ねるように震えている。

「凜ちゃんの……手、熱い……」

声が甘く、掠れている。

普段の清楚な先輩からは想像もできないほど、切なげな響きだった。

「体が……おかしいの……」

先輩は自分の胸を軽く押さえ、息を荒げる。白衣の下で、乳首が硬く尖っているのが、布越しでもはつきりわかった。



媚薬の効果だ。

触覚が極端に敏感になり、わずかな刺激でも、電流のように感じる。

先輩は無意識に太ももを擦り合わせ、座り直す。けれど、その動きが逆の下腹部を刺激したらしく、喉から甘い吐息が漏れた。

「……だめ……」

小さく首を振る。

額に薄く汗が浮かび、黒髪が頬に張り付いている。

両手で太ももを強く握りしめ、必死に脚を閉じようとする。その必死さが、かえって体の正直さを際立たせていた。

唇を噛みしめ、涙が一筋、頬を伝う。

それでも、指先は白衣の裾を無意識に握りしめ、布地をくしゃくしゃにしている。抑えきれない疼きが、全身を駆け巡っているのが痛いほど伝わってきた。

「先輩……ちょっと、休みましょう」

私はできるだけ優しい声で言い、彼女の腰に手を回す。

先輩は一瞬だけ抵抗するように首を振ったけれど、足元がふらつき、そのまま私の腕にすがってきた。

「凛ちゃん……ごめん……」

掠れた声。

白衣越しに伝わる体温が、驚くほど熱い。

柔らかい胸が、私の腕に軽く当たる。

「あっ……」

小さな声が漏れ、先輩自身がびくつと体を震わせた。

私は彼女を支えながら、研究室の隅にある小さなソファへと連れていく。歩くたびに白衣の裾が揺れ、細い脚のラインがちらりと覗くのが、いやでも目に入った。

ソファに腰を下ろすと、先輩は力なく背もたれに凭れかかる。

自然と開きそうになる膝を、慌てて閉じようとするが、その仕草がかえって太ももを擦り合わせ、息をさらに乱してしまう。

私は隣に座り、先輩の横顔を見つめた。

真っ赤な頬。

湿って光る唇。

潤んだ瞳は焦点が定まらず、時折、縋るように私を見上げる。

白衣の胸元が、荒い呼吸で激しく上下していた。

「先輩……熱いですね。汗、いっぱい」

囁くように言うと、先輩は小さく首を振る。声は出ない。ただ喉がごくりと動くだけだった。

私の視線に気づいたのか、両腕で胸を抱きしめるように隠そうとする。けれど、その仕草で乳房が押し上げられ、かえって形が強調されてしまう。

心臓が、どくどくと鳴る。

私自身の体も、はつきりと熱を帯びていた。

清楚で優しい先輩が、媚薬に抗いながらも、必死に疼きを堪えている。その吐息が耳元で甘く響くたび、下腹部がきゅっと締め付けられる。

「凜ちゃん……私、なにか……変……」

ほとんど泣き声に近い声。

それなのに、指先が無意識に私の膝に触れてくる。

熱い指が、布越しに私の肌をなぞる。

その一瞬で、私の体にも電気が走った。

先輩の瞳が、私を捉える。

そこにあるのは、理性の薄皮の下で渦巻く、熱く切ない渴望だった。

ソファの上で、彼女の体は熱く火照っている。  
膝がわずかに開いては閉じを繰り返していた。

白衣の裾が乱れ、細い太ももの内側が露わになりかけている。

私は息を詰めて、彼女の顔を見つめた。

潤んだ瞳、赤く染まった頬、湿った唇。

普段の清楚な先輩とは別人のようだ。

それは酷く淫らで、それでいて儚かった。

「先輩……」

私は囁きながら、ゆっくりと顔を近づける。

先輩は一瞬、目を大きく見開いた。

理性の欠片が残っているように、首を振ろうとする。

でも体は正直だった。

私の息が彼女の唇にかかった瞬間だ。

彼女の喉から、甘い吐息が漏れた。

「だめ……凜ちゃん、こんなの……いけない……」

言葉とは裏腹に、彼女の瞳は私を離さない。

涙がもう一筋、頬を伝っていく。

私はそっと、その涙を指で拭った。

そのまま彼女の顎を優しく持ち上げる。

柔らかい肌と、熱い体温。

心臓が、耳元で爆音のように鳴っている。

そして、唇を重ねた。

## 第二話 私だけのものにするために

レポート課題を書くとき、決まって新田小春は私の部屋にやってくる。

同じ大学に通う親友として、この時間はもう、私たちの日常になっていた。理由を聞けば「家だと集中できないから」と言うけれど、実際は私が横にいないと落ち着かないだけだと、私は知っている。

「まどか、今日もコーヒー飲む？」

キッチンから顔を出した小春は、いつも通り少しだけ眠そうで、きちんと揃えた前髪の奥に、不安を隠している。

「うん。ありがとう。無理しすぎないでね」



そう答えながら、私は彼女のノートの書き方や、ペンを持つ指先を目で追っていた。

小春は真面目で素直だ。その分、調子を崩すと、途端に全部が顔に出る。

私はそれを支える役でいるのが、昔から当たり前だった。

体調、気分、締切。小春の小さな乱れを先に見つけて、整えてあげる。

——ただ。

最近、ふと思うことがある。

もし、その整った表情が、私の前でだけ崩れたら。

困ったように視線を揺らして、判断を私に委ねるような顔をしたら。

それを想像してしまう自分に、私はまだ、きちんと名前をつけていない。

「ねえ、まどか」

呼ばれて顔を上げると、小春が少しだけ距離を詰めて立っていた。

その近さに、胸の奥が静かに熱を帯びる。

親友だから。

そう言い聞かせる言葉が、今日はなぜか、いつもより遅れて追いついてきた。

小春は私の向かいに座り、ノートを広げると、いつもより丁寧に文字を書き始めた。

集中しようとしているときの癖で、唇をきゅっと結ぶ。その横顔を見ると、胸の奥が少しだけ柔らかくなる。

「分らないところ、あったら言ってね」

そう声をかけると、小春はすぐに頷いた。

「うん。まどかがいると、安心するから」

その言葉を、彼女は何気なく言う。

それがどれほど無防備な信頼なのか、気づいていないのだろう。

私は立ち上がり、キッチンの棚の奥にしまっていた紙袋の存在を、視界の端で確かめた。

数日前に購入した、小さな瓶の媚薬。効能は曖昧で、注意書きばかりがやたらと丁寧だった。

正直に言えば、効くかどうか分からない。

理由を言葉にするのは簡単ではない。

ただ、試験前で張り詰めている小春が、少しだけ力を抜いて、私に甘えてくれたらいい——そんな、都合のいい考えだった。

「ねえ、まどか」

ページをめくる音の合間に、小春が顔を上げる。

「今日、ここに泊まっていた？」

迷いのないその問いに、私は小さく笑った。

「もちろん。どうせ、遅くなるでしょう」

小春はほっとしたように肩を落とし、またノートに視線を戻す。

その仕草が可笑しくて、愛おしい。

私はマグカップを二つ並べ、お湯を注ぎながら、胸の内で静かに息を整えた。

小さな瓶の中身を、ほんのわずかだけ混ぜる。

透明な液体は、音もなく溶けていった。

心臓が、はつきりと早鐘を打つ。

効くかどうかは、分からない。

けれど——もし、ほんの少しでも変化があるのなら。

そのとき私は、親友としての距離を、どこまで守れるのだろうか。

そんな疑問を、まだ小春には見せないまま、私はカップを差し出した。

「温かいうちに飲んで。無理しないでね」

「ありがとう、まどか」

名前を呼ばれるたびに、私は自分の選択を、ほんの少しだけ肯定してしまう。

カップを差し出してから、数分が過ぎた。

小春はいつものようにコーヒーを一口、二口と飲んで、ノートに視線を戻した。

最初は、何も変わらないように見えた。

ページをめくる音だけが部屋に響き、時計の針がゆっくり進む。

でも、徐々に変化が訪れた。

小春の頬が、ほんのり赤らみ始めた。

最初は勉強の疲れかと思ったけれど、違う。彼女の呼吸が浅く、速くなっている。

肩が小さく上下して、ペンを握る指先が微かに震え始めた。

「ん……なんか、熱い」

小春がぽつりと呟いた。

声が少し掠れている。ノートから顔を上げると、瞳が潤んでいた。いつもより瞳孔が開いていて、焦点が定まらないみたいだ。

「どうしたの？ 熱でもある？」

私は平静を装って尋ねた。

心臓がどくどくと鳴っている。

小春は首を振って、首筋を指で軽く擦った。

「違う……身体の内が、じんじんする。変な感じ……」

彼女の言葉に、私の喉が鳴った。

媚薬。効いている。効いているんだ。

小春はノートを閉じ、両手で自分の頬を押さえた。

息が荒い。膝を擦り合わせるようにして、ソファに深く沈み込む。

「まどか……なんか、おかしいよ。私、熱くて……」

彼女の声が甘く、掠れて、私の耳に絡みつく。

視線が私に絡みついて、離れない。

いつもは穏やかで、少し眠たげな瞳が、今は熱を帯びて揺れている。

私はそっと近づいて、彼女の隣に座った。

距離が近い。彼女の体温が、服越しに伝わってくる。



甘い匂いがする。

コーヒーの香りと、彼女自身の匂いが混じって、頭がくらくらする。

「熱いところ、どこ？」

私が囁くと、小春は小さく震えた。

恥ずかしそうに、でも正直に答える。

「ここ……胸とか、お腹の下とか……全部、熱くて、疼くみたい……」

彼女の手が、自分の胸元を押さえる。

ブラウス越しに、乳首が硬く尖っているのがわかる。

息を吐くたびに、胸が上下して布地が擦れる音がする。

私は我慢できずに、手を伸ばした。

## 第三話 恋人のいる親友との一夜

大学三年の春。

私、酒井佳乃は、可もなく不可もない日常を送っている——少なくとも、外から見ればそうだった。講義に出て、課題をこなし、たまに友人とお酒を飲む。女子大生としては、ごく普通の生活だと思う。

けれど、私の心の中心には、いつも鯉川玲がいた。

鯉川玲は、私の親友だ。

高校の入学式の日、同じ電車で迷って、同じ方向に走って、同じように息を切らして笑った。それから今日まで、隣にいるのが当たり前になった人。

彼女には、恋人がいる。

女の人だ。私じゃない。

その事実を、私は何度も、何度も、心の中で唱えてきた。唱えれば唱えるほど、呪文みたいに効いてくれると信じて。でも——効かなかった。

抱きたい、と思ってしまう。

髪に触れたいとか、手を繋ぎたいとか、そんな綺麗な言葉じゃ足りない。もっと近くて、もっと深いところまで、玲を欲しいと思ってしまう自分がいる。

最低だ、と頭ではわかっている。

親友で、彼女には大切な人がいて、それでも私は——。

届いた一本の瓶を見たとき、胸の奥がひくりと痙攣した。

それは、飲ませた相手の理性をやわらかく溶かし、欲情だけを浮かび上がらせると説明されていた——いわゆる媚薬だった。

こんなものを買うなんて。こんなことを考えるなんて。私は、どこまで落ちるつもりなんだろう。

夜になって、部屋の明かりをつける。

いつも二人でお酒を飲んだり課題をやる、見慣れたワンルーム。ここは安全な場所だったはずなのに、今日は少しだけ、空気が違って見えた。

——ねえ、今日うち来ない？

送信したメッセージは、驚くほどあっさりしていた。  
しばらくして、玲から返事が来る。

「いいよ。ちょうど空いてる」

画面を伏せて、私は深く息を吸う。

もう戻れないところまで、来てしまった気がした。

メッセージを送ってから、私は部屋の中央に立ったまま、しばらく動けずにいた。

時計の針の音だけが、やけに大きく聞こえる。

まずは片付けをしよう、と自分に言い聞かせる。

床に置きっぱなしだった参考書を本棚に戻し、ソファの上のブランケットを畳む。いつもなら気にも留めない些細な乱れが、今日はやけに目についた。

玲を迎える準備。

そう考えるだけで、胸の奥がきゅっと締めつけられる。

キッチンに立ち、グラスを二つ出す。

棚の奥からワインボトルを取り出し、ラベルを確かめる。前に二人で飲んだことのある、軽い口当たりの赤。アルコールに弱くない玲でも、これなら警戒しないだろう。

——私は、何を考えているのだろう。

バッグの内ポケットに触れる。

そこにある小さな包みの存在を意識した瞬間、心臓が早鐘を打った。

飲ませるつもりなのか。

本当に——そんなことを、するつもりなのか。

自分に問いかけても、答えは返ってこない。ただ、否定の言葉を探そうとするたびに、別の声がそれを遮る。

一度くらい、私のことを見てほしい。

そんな、卑怯で、弱い願いが。

グラスを洗いながら、私は唇を噛んだ。

親友であることに、どれほど甘えてきたのだろう。信頼の上に胡坐をかいて、その信頼を裏切る準備をしている自分が、ひどく醜く思える。

——まだ、間に合う。

——やめてしまえばいい。

何度もそう思うのに、飲ませる想像だけが、頭から離れない。

インターホンが鳴ったのは、そのときだった。

びくりと肩が跳ねる。

時計を見ると、約束の時間ちょうど。

深く息を吸い、吐く。

玄関へ向かう足取りが、ひどく重い。

ドアを開けると、そこには見慣れた笑顔があった。

「お邪魔します、佳乃」

鯉川玲は、何も知らないまま、私の部屋に足を踏み入れた。

「わ、ちゃんと片付いてる。珍しいね」

部屋に入るなり、玲はそう言ってくすりと笑った。

からかう声音は、いつもと同じだ。私は曖昧に笑い返しながら、ドアを閉める。

「たまにはね。大学三年にもなると、少しは成長するんです」



「その割には、この前レポート忘れてたじゃん」

「……あれは事故です」

二人で顔を見合わせて笑う。

こうしていると、本当にいつも通りで、何も問題なんてないみたいに錯覚してしまう。

玲は靴を脱ぎ、慣れた様子でソファに腰を下ろした。

まるで自分の部屋みたいにくつろぐその姿に、胸の奥がちくりと痛む。こは、ずっとそういう場所だった。

「今日、ワインあるって言ってたよね」

「うん。前に一緒に飲んだやつ、まだ残ってた」

「助かる。最近、彼女があんまり飲めない時期でさ」

何気ない一言。

それだけで、心臓が一拍、遅れる。

「あ、そうなんだ」

声が震えないように気をつけながら、私はキッチンに向かった。  
背中越しに聞こえる玲の声は、どこまでも自然だ。

「別に喧嘩してるとかじゃないよ。ただ、向こうも忙しいしね。だから、こ  
うやって佳乃と飲むのは、なんか落ち着く」

——落ち着く。

その言葉を、私は何度も嚙みしめる。

グラスを二つ並べ、ワインを注ぐ。

液体がグラスに当たる音が、やけに大きく感じられた。

「佳乃ってさ」

玲がソファから身を乗り出す。

「昔から変わらないよね。こういうところ。ちゃんと話聞いてくれるし、無理に踏み込んでこないし」

それは、褒め言葉なのだろう。

親友としては、きっと正解の距離感。

「そうかな。ただの臆病なだけだよ」

「それを優しいって言うんだよ」

笑いながら言われて、胸の奥がきゅっと締めつけられる。

もし本当に優しいなら、私は今、こんな準備をしていない。

グラスを持ってソファに戻ると、玲は自然にスペースを空けてくれた。肩が触れそうで、触れない距離。

その僅かな隙間に、私はどうしようもなく意識を向けてしまう。

「じゃあ、乾杯」

「うん。お疲れさま」

グラスが軽く触れ合う。

澄んだ音とは裏腹に、私の内側は濁っていた。

何も知らない顔でワインを口に運ぶ玲を見つめながら、私は思う。

この人は、きっと誰に対しても誠実で、誰の前でも同じように笑う。だから、彼女がいるのに、こうして私の部屋でお酒を飲むことにも、何の疑問も持たないのだろう。

——それを利用しようとしているのは、私だ。

グラスを握る指に、力が入る。

背徳感と、消えない期待が、胸の中で静かに絡み合っていた。

「そういえばさ」

グラスを傾けながら、玲がぼつりと言った。

「この前、彼女とちょっと話しててさ。将来のこととか」

私は頷きながら、ワインを一口飲む。

舌に広がる渋みよりも、その言葉の方が、ずっと強く残った。

「別れるとかじゃないよ。ただ、考え方が少し違うなって思っただけ」

そう前置きするところが、玲らしい。

誰かを悪者にしない言い方。自分も相手も、同じくらい大事にする話し方。

「でも、嫌いになったわけじゃないし。今も普通に会うし、たまにこうやって飲んだりもする」

——私とも、同じように。

喉の奥が、きゅっと鳴る。

私は親友で、彼女は恋人。その差は、明確なはずなのに、こうして同じ「飲む相手」に並べられると、境界が曖昧になる。

「佳乃はさ、どう思う？」

不意に振られた問いに、私は一瞬、言葉を失った。

どう思う、なんて。

本当のことを言えば、この場が壊れてしまう。

「……玲が後悔しないなら、それでいいと思うよ」

無難で、正しい答え。

親友としては、満点だ。

「やっぱり佳乃に聞いてよかった」

安心したように笑う玲を見て、胸の奥で何かが、静かに折れた。

——私は、何を守っているのだろう。

グラスの中身が、少し減っている。

もう一度注ぐと立ち上がったとき、玲がふっと眉を寄せた。

「ごめん、ちょっとトイレ借りるね」

「うん、どうぞ」

ドアが閉まる音が、思った以上に大きく響いた。

一人きりになった部屋で、私は動けずに立ち尽くす。

時計を見る。ほんの数分。何も起こらない時間。起こしてはいけない時間。

それでも、心の奥に沈めていた考えが、浮かび上がってくる。

このまま、何もせずに終わらせたら。

また私は、「いい親友」でいるだけだ。

媚薬の瓶に手を伸ばす自分を、止める理由は、もう見つからなかった。



——一度だけ。

——今日だけ。

自分にそう言い聞かせながら、私はグラスに視線を落とす。  
何も変わらない見た目が、かえって残酷だった。

トイレの水音が、遠くで聞こえる。

私は目を閉じ、短く息を吸って、吐いた。

そして——戻れない一線を、越えた。

その直後、ドアの向こうで足音がする。

「お待ちせ」

何も知らない声が、部屋に戻ってくる。

「やっぱりこのワイン、飲みやすいね」

ソファに戻ってきた玲が、何気なくそう言ってグラスを手取る。

私は一瞬、視線の置き場を失い、それから慌てて自分のグラスを見るふりをした。

「うん。前に美味しいって言ってたから」

声は、思ったよりも平静だった。

それが余計に怖い。内側では、心臓が落ち着きなく跳ねているのに。

玲がグラスを傾ける。

喉が動くのを、私は見てしまった。

——飲んだ。

ただそれだけのことなのに、手のひらがじんわりと熱くなる。

私もワインを口に含む。味は、さっきと変わらないはずなのに、どこか別  
のものを飲み込んでいる気がした。

「どうしたの？」

「え？」

「顔、赤い」

指摘されて、思わず頬に手を当てる。

火照りは、ワインのせいだ。そう言い聞かせる。そうでなければ、説明が  
つかない。

「ちょっと飲むペース早かったかも」

笑って誤魔化すと、玲は「気をつけなよ」と優しく言った。

その気遣いが、胸に刺さる。

背徳感が、遅れて押し寄せてくる。

私は今、何を期待しているのだろう。

もし、何も起きなかったら。

もし、起きてしまったら。

どちらを想像しても、胸がざわつく。

玲は、いつも通りの距離で座っている。

いつも通りに話して、いつも通りに笑っている。

それなのに、私は彼女の仕草一つひとつに、過剰に反応してしまう。  
膝の向き。視線の高さ。グラスを置く指先。

——まだ、変化はない。

——それとも、私が気づいていないだけ？

期待と不安が、胸の中で絡まり合う。

最低だと思う気持ちは消えない。それでも、完全には後悔していない自分がいることに、私は気づいてしまった。

もし、玲が少しだけ近づいてきたら。

もし、いつもより長く目を合わせてきたら。

その「もし」を、私は心のどこかで、待っている。

グラスの中身が、また少し減った。

鼓動の音が、耳の奥でやけに大きく響いている。

しばらく時間が経って、玲は頬を少し赤らめていた。

「なんか、熱い……」

彼女の声が、少し掠れていた。

私はそっと玲の肩を抱き寄せた。

「大丈夫？」

玲の体が、いつもより柔らかく、私に寄りかかる。

媚薬の効果は、ゆっくりと、確実に彼女の体を蝕んでいく。

玲の瞳が、ぼんやりと潤み始めた。

「ごめん……なんか、変……」

彼女の指が、私の腕を掴む。

強く、でも頼りなく。

私は無意識に、玲の唇を目で追ってしまふ。

言葉の合間にわずかに開く形。

ワインで少し潤んだ色。

私は玲の唇に、自分の唇を重ねた。

熱い。

玲の息が、甘く溶けていく。

舌を絡めると、彼女の舌が、初めてのように震えた。

「だめ……私、彼女が……」

玲の言葉は、途中で途切れた。

私は彼女の首筋に唇を這わせ、耳元で囁く。

「今は、私だけを見て」

玲の体が、びくんと震えた。

媚薬が、彼女の理性を溶かし、抑えていた欲望を解き放つ。

私は玲のブラウスをゆつくりとはだけさせた。

白い肌が、月明かりに透ける。

乳房の先端が、すでに硬く尖っている。

指でそっと摘まむと、玲の腰が浮いた。

「あ……っ、ん……」

甘い声が漏れる。

私は玲の乳首を口に含み、舌で転がした。

彼女の体が、弓なりに反る。

「や……だめ、そこ……」